第７１９号　ヤスクニ通信 ２０１５年１２月１４日

日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会

〈祈りのために〉

**「夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう。日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、主イエス・キリストを身にまといなさい。**（ローマの信徒への手紙13章12～14節）

　主イエス・キリストの降誕を祝う準備の待降節を迎える時、約2千年前にイエス様に先駆けて登場したバプテスマのヨハネを思い出します。ヨハネは荒れ野で人々に罪を悔い改める道を示し、「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ」とのイザヤの言葉を実践しました。一方、ローマの信徒への手紙や多くの書簡を記したパウロは、復活されたイエス様と出会うまで「主の道を壊し、その道筋から人々を離れさす」ことに、生きる目的を見出していました。しかし神様はそのようなパウロを、母の胎内にいるころから「主の道を整え、その道筋をまっすぐにする」働きへと召しておられたのです。（ガラテヤの信徒への手紙1章16節）

この待降節は主の再臨を待ち望む時でもあります。パウロは主の再臨が近いと思っていました。再臨の主イエス・キリストを迎えるにあたり、キリスト者はどのような備えをしたら良いのかをパウロは今日の個所で示しています。①光の武具を身に着ける。②品位をもって歩む。③主イエス・キリストを身にまとうこと。①の光の武具を身に着けるとは、光の武具であるイエス様と共なる歩みをして、闇の力、罪の力と闘っていくことです。②品位をもって歩むとは、主の日の礼拝の御言葉を通して、神様と向き合って歩んでいくことです。③主イエス・キリストを身にまとうとは、自己中心という服を脱いで、信仰生活の基盤を神様に向けて歩んでいくことです。このパウロの言葉は、バプテスマのヨハネが実践したことと同じではないでしょうか。「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ」と、パウロはこれらの言葉を通して語っていると思います。そこには、バプテスマのヨハネが人々に示した神様への悔い改めがあることは言うまでもありません。

今の時は、衆議院議員の選挙の時でもあります。時の政権は「景気回復、この道しかない」と叫んでいますが、「景気回復の他、衣の下には様々なこの道しかない道」を持っているのではないでしょうか。このような政権に対して私たちは、「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ」と宣言するために用いられ、祈る群れでありたいと願うものです。

祈り…父なる神様、どうか私たちの信仰が御言葉によって新しくされ、キリストと共にある歩みへと導かれ、主の御用のために喜んでも用いられますように祈ります。アーメン

　　　　　　　小林　正（高槻教会　長老、近畿中会「教会と国家に関する委員会」委員）

**ヤスクニ問題とわたし**

北村千尋　(折尾伝道所牧師)

　わたしの中に靖国神社問題が鮮明に刻印されたのは、1970年代に安利淑著『たといそうでなくても』を読んだ時であった。戦時下、植民地であった朝鮮・韓国の教会に対して日本の当局が神社参拝を強制したが、信仰のために死ぬ覚悟で生きた聖徒の戦いに深く心を揺さぶられた。わたしは他の教派を遍歴した後、1986年に日本キリスト教会に所属したが、自らを顧みて靖国闘争を垣間見ながらも、あまり真剣に関与して来なかった。つかず離れずであった。そんな自分が今このようなテーマを与えられて自分の歩みが照射される時、認識の浅いわたしは学び直さねばならなかった。『日本キリスト教会50年史』の当該部分を読み確認したことは、これはキリストの主権に関わる信仰告白に基づいた教会闘争の展開であり、国家権力からの独立の主張であると共に、伝道そのものの強化が求められるということである。

　戦時下の日本の基督教は国家の権力に呑み込まれ、その前にひざまづいた。「基督教は血の意義を最も深く自覚した宗教である。キリストの血に潔められた日本基督者が、護国の英霊の血に深く心打たれるのは血の精神的意義に共通のものがある。靖国の英霊を安んじる道は敵殲滅の一途あるのみである」などという驚くべき言葉が語られた。内村鑑三の告別式を司った藤井武でさえ、その著『聖書より見た日本』の中で、万世一系の天皇を上に戴く国体のことを指して「わたしは聖書の光に照らされて自分の愛する国のおごそかな姿を見た」と書いた。彼には祖国に対する激しい民族批判もあるが、彼も時代の子であり皇国史観の余波が及んでおり、無教会での自己批判もある。高橋哲也は「今、1940年の日本にタイムスリップしたとして、神の前に単独者として信仰を貫いて靖国を拒否できたという方がどの位いるか、たとえそれが教団を守るためであるにしても天皇教になってしまっているなら、そのようなものを守る意味があるのか」と問うた。わたし自身は先輩たちを批判する資格などは全くない弱い人間に過ぎない。しかしわたしたちは彼の問いかけを受け止めねばならないだろう。

ヴァイツゼッカーはあの演説の中で言った、「戦争中は大部分のドイツ人が、自分たちは祖国にとって良いことのために戦い、苦しまなければならないのだと信じ込んでいた。そして今や明らかにならざるを得なかったことは、唯単にそのすべてが無駄であったと言うだけでなくて、犯罪的な政府が目指した非人間的な目標の達成に役立ってしまったということだ。過去を清算することは我々には全くできない。過去を後から変更したり、無かったことにすることはできない。しかし、過去に目を閉じる者は、現在を見る目をも持たないのだ。過去の非人間的な事柄を思い起こしたくない者は、新しく起こる非人間的なものの伝染力に負けてしまう者なのだ。忘却を望む心は出エジプトの悲惨を長引かせるのみだ。そしてそこから救われる秘訣は思い起こすべきことを思い起こすことである。想起は救済を信じる信仰の源泉である。この経験が希望を造り、救済の信仰を造り、和解の信仰を造る」と。

悪しきものはそれを美化して顕彰すべきではない。罪を犯したダビデが神の前に「わたしを御慈しみをもって憐れんで下さい。打ち砕かれ悔いる心をあなたは侮られません」と祈っていることをわたしたちは知っている。わたしたちは歴史を正しく認識することは「自虐」などではなく、和解をもたらすものであることを教えられているのである。

**「2014年九州中会ヤスクニ学習会の報告」**

秦　博記（大分中央教会長老・九州中会ヤスクニ問題委員会）

11月3日（月）福岡城南教会を会場に、主題「集団的自衛権」を学習した。午前中、島田善次牧師(宜野湾告白伝道所)の講演「集団的自衛権と沖縄」。午後には、川越弘牧師(沖縄伝道所)による｢集団的自衛権｣の概念と歴史の概説等々と、4人のパネラーによる発表がなされた。出席者は37名（男性17名・女性20名）。

これまでは外部講師による講演会が恒例であったが、今回は｢自家製」で行うと共に、連合長老会等と同じ日に実施していたものを一日かけて行った。借り物でない主体的な学びを通して、自らの血肉とすることが必要と判断したからだ。それが教会形成と宣教につながればと願った。予想を上回る出席者が集まった。とりわけ女性の出席者が多かった。

主題講演で、講師は拡大した沖縄新聞の基地闘争の写真を見せ、参加者は基地反対者の圧倒的な勢いに釘づけにされた。また「『集団的自衛権の行使』は沖縄では既に始まっている。米軍基地は“日米共同使用中”であり、沖縄は米国と日本(ヤマト)の奴隷状態から未だに解放されていない」と熱く語られた。他のパネラーたちの報告（以下に発表内容を概述）も、各自の熱心な勉強の成果が十分に伺える内容で、会衆の真剣な眼差しが印象的であった。

＜秦　博記（大分中央教会)＞　…戦争をなくするには、歴史の失敗に学んで戦争の危険を摘み続けるしかない。｢ゴミ拾い」は、ゴミを捨てる人がいなくならないと終わらない。戦争は人類にとって最大、最強、最悪の｢ゴミ｣だ。｢集団的自衛権｣の行使は『ゴミ拾い(抑止力)』だと、現政権が主張する。しかしそれは｢味方の敵は敵｣、｢敵の味方は敵｣の論理だから、結局、望んでいない思わぬ敵を造ってしまうことになる。つまり「ゴミを捨てる」ことだ。

＜野口千恵子（折尾伝道所）＞　…「（閣議決定のあった）2014年7月1日は憲法が死んだ日」と後世の歴史教科書に記述するだろう。私たちは憲法制定権者であり主権者だ。安倍政権は国民と国会を無視した。この手口は、ワイマール憲法を無力化したヒットラーを想起させる。九条の会で街頭署名活動に参加した折、その危険を感じていない人が多いことに懸念している。とくに戦争の悲惨さを知らない若者が、安易な同調を示すことに危機感を禁じえない。黙っていてはいけない。勇気をもって次代を担う若者たちともっと対話することが大切。

＜榎本扶美子（久留米教会）＞　…いよいよ民主主義が壊されつつある。立法府が機能不全で、行政府が代行するような独裁体制に移行している。自民党の目指す新しい日本は、基本的人権を制限し「右向け、右」的な従順な国民を育てる全体主義だ。国民は、国の供給する物を受け取って、それで満足する「消費者意識」から脱け出せない。学校の道徳教育によって幼少期から造られている。経営に加わらないサラリーマン根性の国民が、この危機的状況をノーテンキに見過ごす。「お任せ、お任せ」の消費者意識が、教会に侵入していないか。

＜上野恵子（福岡城南教会）＞　…そもそも「集団的自衛権」とは、日本が攻撃を受けていないのに他国に攻撃をしかける…つまり「先制攻撃」と「海外派兵」を可能にするものだから、「侵略」に等しい。いまや反動的な法案や施策が続々と施行されている。秘密保護法や労働者派遣法改正や武器輸出法や原発再稼働などなど。集団的自衛権は“百害あって一利なし”。日本キリスト教会は、議場で第二日曜日の礼拝後に靖国神社国家護持反対の祈りを捧げることにしたが、その祈りが立ち消えになっている教会が多いことを憂うる。ベルリンの壁も、教会の絶え間ない祈りによって変化が起こって崩壊したことを覚えたい。

会を閉じるにあたって、司会者は「朝鮮の教会は、日本による植民地化という苦難の中で、教会が先んじて民衆の苦悩を担って祈り求めた。その結果として神のことばが広まった。日本の教会は、虐げられている民衆の苦難を教会の苦難としているだろうか」と結んだ。

オール沖縄　反辺野古新基地知事誕生

川越弘（沖縄伝道所牧師）

翁長雄志新知事誕生は、沖縄のアイディンティティーが政治イデオロギーに圧勝した選挙であった。ここには、ウチナンチュウ（沖縄人）意識の変化があった。基地重圧からの脱却を求めるだけでなく、基地は沖縄経済を阻害しているという認識を明確にした。戦後70年近い基地の押し付け、沖縄の意向を無視する政策の強行、何度も抗議しても全く耳を貸さない政府への大きな抵抗の表現であった。権力が支配し政治的イデオロギーの働く世界で、沖縄の覚醒による魂の叫びが民衆の根底にあって、アイディンティティーという人間の根源力を基盤に政治性を含有しながら、これまでとは異質の主張を展開したのである。

昨年の12月25日、[自民党](http://www.asahi.com/topics/word/%E8%87%AA%E6%B0%91%E5%85%9A.html)の[石破茂](http://www.asahi.com/topics/word/%E7%9F%B3%E7%A0%B4%E8%8C%82.html)幹事長との会談で、沖縄の自民党国会議員５人が名護市[辺野古](http://www.asahi.com/topics/word/%E8%BE%BA%E9%87%8E%E5%8F%A4.html)新基地建設（普天間基地移設ではない）を容認した。その2日後の27日、仲井真弘多知事は選挙公約を無視して辺野古の埋め立てを承認した。そこでは、3400億円超の振興予算を確保し、仲井真は「有史以来の予算。いい正月になる」と笑った。「なにがいい正月だ」、「それが知事の言うことか」。沖縄に人々からいまだに不満の声を聞く。仲井真の支持者であった企業役員すら「腹の底から怒りを覚えた」と言っている。

翁長雄志は選挙戦で、「あらゆる手段を駆使して、辺野古に新しい基地を造らせない」と公約して、現職を10万票の差で破った。就任後は日米両政府への働きかけを強めるほか、仲井真知事が昨年末に承認した辺野古埋め立て承認の取り消しと撤回を示唆し、政府が県に提出している埋め立て工法の変更申請も厳しく審査する方針を示して、工事を止める方策を検討する。それに対して政府は、知事選の結果を問わず移設計画を進める考えで、闘いはこれからもっと厳しくなる。

今回の沖縄県知事選では、共産や社民だけでなく、保守系の人たちまでもが自民党除名処分を覚悟して辺野古新基地反対の翁長前那覇市長を支持して、一致団結して戦った。ここには保守対革新という対立構図はない。「[オール沖縄](http://www.zenshoren.or.jp/shisaku/senkyo/141013-01/141013.html)」を標榜している沖縄の自己決定意識と日本への同化意識との対立だけがある。そして「オール沖縄」が現実化した沖縄の政治情勢が、今や日本政治全体のなかで最も先進的なものとなっている。

|  |
| --- |
| 719号ヤスクニ通信2014年12月14日発行 日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会 発行人　栗田英昭　編集 川越弘印刷発行 篠塚予奈（東京告白教会）〒157-0061東京都世田谷区北烏山1-51-12 　TEL＆FAX03-3300-6529 |

[55年体制](http://ja.wikipedia.org/wiki/55%E5%B9%B4%E4%BD%93%E5%88%B6)の保革対立が終焉した後の日本政治の混迷は、いまだに収拾されていない。いまや政治的意識を持った日本人が保守を自称しようがリベラル・左派を自称しようが、それらの立場的差異は余り意味がなくなってきた。日本がポツダム宣言を受諾して敗戦宣言をした戦後の原点を、しっかりと正確に見つめ続けることから再出発すべきだからである。明治国家は敗戦によって神から罰せられた。戦後はその償いを償うべきであったが、その自覚が全く足りなかったし今も足りない。沖縄を日本の道具のように利用して、自ら負うべき責任を沖縄に負わせて沖縄を未だに見下ろしている。日本は戦後の経済繁栄に酔い、唯々諾々としてアメリカに群がって生きてきた。それがいま問われており、日本国民がここに立たされている。今回の沖縄の知事選は、この根本的な課題を日本に投げかけたのである。

**＜編集部から＞**

* 11月号3ページのイラストに、商標「Ⓒ井上ひさし・山元護久・ひとみ座・NEP」がついていませんでした。おわびいたします。